

博士学位論文審査要旨

2007年11月14日

論文題目： 日本海沿岸地域における旧石器時代の研究

学位申請者： 麻柄 一志

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 松藤 和人

副査： 文学研究科 教授 武藤 直

副査： 文化情報学部 専任講師 津村 宏臣

要 旨：

本論文は、過去 25 年間にわたって北陸を中心とする日本海沿岸地域の旧石器時代研究を主導してきた申請者が、汎列島の視野のもとで日本海沿岸地域の旧石器文化の実態と特質を多角的かつ周密な検討・分析を通じて究明してきた成果を集大成したものである。一連の研究を通じて、北陸地域の旧石器文化変遷を時間系列に沿って再編成する中で、隣接地方（東北・中部高地・関東・近畿）からのさまざまな文化的影響のもとに展開した本地域の後期旧石器文化の実態を実証的研究法のもとで明らかにした。

第I章では、北陸地方の旧石器編年研究史の叙述に充て、岩宿の発見以降の個別的研究を踏まえながら発掘調査・研究の成果と問題点の所在を明示する。また広域火山灰（始良 Tn 火山灰）、直坂遺跡群、樽口遺跡、野尻湖遺跡群における層位的出土例を基準に後期旧石器時代石器群を7期に時期区分する編年案を提示する。

第II章と第IV章では、日本海沿岸地域における瀬戸内系石器群の3段階にわたる伝播を想定しつつ、個別遺跡の出土資料を検討し、特定石材と外来要素としての瀬戸内系技術との関連性を石材環境を絡めながら、詳細かつ綿密な分析に立脚した考察をおこなっている。そして日本海沿岸地域における瀬戸内技法の伝播とその源郷地での石材利用構造の類似を、瀬戸内系集団の北陸への移動と連関させながら理解する斬新な考えを提示する。

第III章では、富山盆地で発見された後期旧石器時代前葉の立野ヶ原石器群を取りあげ、火山灰層序学的検討、石材の選択性、石器形態、石器組成、剥片剥離技術の分析をおこない、さらに東北地方に顕著な分布をもつ「米ヶ森技法」との比較検討ともあわせて、立野ヶ原石器群の系譜・編年の位置を確定した。

第V章では、北陸の旧石器時代に出土例の多い斧形石器（刃部磨製石斧）の出土層準、石器組成等を検討し、北陸における編年の位置を確定した。またその機能について再検討をおこない、定説とされていた木材伐採用具説に異論を唱え、周辺大陸の民族誌を援用しつつ「革鞣し具」としての用途を提唱した。

第VI章では、中国での観察所見を踏まえて日本列島と大陸の旧石器文化との接点を追求し、日本列島における後期旧石器文化的要素としての装身具に焦点を当て、国内関連資料の集成、大陸側資料との比較ならびに編年的検討を通じて日本列島に伝播した北方系要素として結論づけた。

北海道から山陰地方までおよぶ日本海沿岸地域は、厚い火山噴出物に恵まれた一部の地域を除き、後期旧石器時代相当の堆積物が総じて薄く、層位的編年研究にとって不利な条件を抱える地域として知られる。申請者はこのような研究環境のもとで、技術形態学的分析法を基軸に据え、隣接地域の研究成果を批判的に参照しながら日本海沿岸地域に展開した旧石器文化変遷の実態を明らかにした。本地域を特徴づける隣接地域からの多様な文化流入を集団の移動を伴った文化

現象として解釈し、文化的独自性の強い太平洋岸（関東地方）の旧石器文化とは対照的に、日本海沿岸地域に展開した旧石器文化の実相と特質の解明に大きく寄与した。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2007年11月14日

論文題目： 日本海沿岸地域における旧石器時代の研究

学位申請者： 麻柄 一志

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 松藤 和人

副査： 文学研究科 教授 武藤 直

副査： 文化情報学部 専任講師 津村 宏臣

要 旨：

上記審査員3名は、2007年11月10日午後2時から約2時間半にわたって、学位申請者に対する学力確認の口頭試問をおこなった。

学位申請者は、審査委員からの提出論文に関する専門的知識はもとより、関連する分野への質疑に対して的確かつ詳細な応答をおこない、学力水準の高さを証明した。

また語学（英語・中国語）についても十分な能力を有していることを確認した。

以上の学力確認の結果にもとづき、学位申請者は博士（文化史学）（同志社大学）に相応しい学力を有するものと判定する。

博士學位論文要旨

論文題目： 日本海沿岸地域における旧石器時代の研究

氏名： 麻柄 一志

要旨：

日本列島における旧石器時代の研究は、1949年の岩宿遺跡の発見以来、更新世の地層の堆積が良好な関東地方を中心に進められてきた。しかし、研究史でも明らかなように東北地方や中部地方の日本海側でも岩宿遺跡の発見の前後から旧石器時代の遺跡が発見され、その後も発掘調査の成果が蓄積されている。旧石器時代の研究では研究の前提として、遺跡や石器群の年代を明らかにする必要がある。残念ながら日本海沿岸地域では旧石器時代に堆積した地層が総じて薄く、発掘調査において層位学的方法を用いて石器群の相対的な年代位置付けが判明するわけではなく、石器群の編年や年代決定に十分な条件が整っているとはいえない。しかしながら、この地域の特徴として、旧石器時代の各時期において西方や北方から、さらに東方からの影響が色濃く表れ、集団の移動を他地域に比べて明瞭に把握できるという特色がある。

本研究ではこうした地域的特色を踏まえ、数は少ないが1遺跡において重複する文化層が認められる遺跡における石器群の序列を基軸に石器群の編年をおこない、剥片剥離技術、石器型式、石器組成、石材の選択、石器の機能などの分析を通して当該地域の旧石器時代の文化的特質を抽出し、日本海沿岸地域に展開した集団の動態把握を志向したものである。

以下各章ごとに概要を述べる。

第I章では北陸地域の旧石器時代の研究史を振り返り、各石器群の研究概要を示し、現段階での石器群の編年仮説を提示した。

1956年の新潟県津南町本ノ木遺跡の発掘に始まり、現在までの北陸地方の旧石器時代研究史を概略し、研究が個人単位からグループ・団体へと移り変わってきた流れをたどり、日本列島の旧石器時代研究における北陸地方のはたした役割についてあらためて検討し再評価をおこなった。次に研究史を踏まえ、北陸地方の旧石器時代石器群の通時的な変遷を呈示した。編年の方法としては、条件は充分とはいえないが、層位的に複数の石器群が重複して検出された新潟県朝日村樽口遺跡、富山県富山市直坂Ⅱ遺跡の調査で得られた石器群の編年を基軸に、同一地域で鍵層としての広域火山灰が複数検出され、これらの広域火山灰を基準に石器群の新旧を判定できる新潟県津南町域での近年の発掘調査の成果と、さらに各遺跡の基本層序が共通し、遺跡が異なっても石器群の対比が層位的に可能な長野県信濃町野尻湖遺跡群の調査成果を総合して石器群の編年をおこなった。

第II章は、石器製作技術と石器形態で特徴づけられる石器群が、使用石材の意図的な選択をおこなっていることを指摘し、石材選択が剥片剥離などの技術的要因と集団の故地における石材選択性が影響を与えるという文化的な背景が存在することを論じた。

富山県立野ヶ原遺跡群の限定された地域の遺跡群で瀬戸内系、東山系、立野ヶ原系、茂呂系、尖頭器石器群がそれぞれ限定される石材を使用していることを明らかにし、このことが日本海沿岸の全地域に敷衍化できることを論じた。瀬戸内系は輝石安山岩、東山系は珪質頁岩、立野ヶ原系はメノウと鉄石英、茂呂系は珪質頁岩と流紋岩、尖頭器は黒曜石と輝石安山岩を石材として使用する頻度が高い。この石材選択は同じ石材環境の下でおこなわれていることから、文化的な背景を要因としている可能性が高いと考えられる。

さらに日本海沿岸地域の瀬戸内系石器群が福井県から富山県、長野県北部、新潟県西部ではほとんど輝石安山岩を用いているが、新潟県東北部から山形県にかけての珪質頁岩地帯では珪質頁

岩を選択し、越中山遺跡 K 地点のようにあえて輝石安山岩に類似した凝灰質砂岩、凝灰質泥岩を用いている点は、東北地方で瀬戸内系石器群を残した集団の出自に係わる文化、伝統的背景を示唆している。同様のことは太平洋側の遺跡でも指摘でき、下呂石の原産地周辺に瀬戸内系石器群が出土する遺跡が集中する事実は下呂石が外見上安山岩に似ていることから安山岩の代用品として下呂石が用いられた蓋然性が高いと考えられる。

第Ⅲ章は北陸地方に特徴的な立野ヶ原型ナイフ形石器を主体とする立野ヶ原系石器群が斧形石器を伴出することや他地域で類似する形態の石器が台形石器として後期旧石器時代初頭に位置付けられることを論証し、この石器群が山陰地方から北海道までの日本海沿岸地域に広域かつ特徴的に分布することを明らかにした。特に米ヶ森技法や類米ヶ森技法と呼ばれる矩形剥片連続剥離技術は日本海側に色濃く分布しており、旧石器時代初頭の地域性が指摘できる。

まず北信越の局部磨製石斧を出土した 12 遺跡の石器群を対象として石器群の様相と出土層位について検討をおこなっている。その多くが AT 下位で後期旧石器時代初頭に位置付けられ、立野ヶ原型ナイフ形石器を伴出する。また列島における他地域（九州～東北地方）の後期旧石器時代の局部磨製石斧も大半が後期旧石器時代初頭に属し、立野ヶ原型ナイフ形石器と類似する形態のナイフ形石器（台形石器）を伴う場合がしばしば認められる。特に関東地方と東北地方の局部磨製石斧には形態的共通性を看取することができる。

次に局部磨製石斧を伴う石器群と称した石器群を富山平野の当該遺跡の剥離技術とナイフ形石器の形態分析から立野ヶ原型ナイフ形石器と呼称し、年代的に後期旧石器時代初頭に位置付けた。特に剥離技術は打面転位を頻繁におこない残核がサイコロ状になるものと米ヶ森技法によるものの 2 者があることを明らかにした。

さらに後期旧石器時代初頭における立野ヶ原型ナイフ形石器の剥離技術の一つである米ヶ森技法に類似する剥離技術（類米ヶ森技法）が、列島各地の立野ヶ原型ナイフ形石器に類似する石器群とその技術基盤においても共通しており、類似した技術基盤と石器形態が日本海沿岸地域に特に集中して分布していることを明らかにした。また、こうした剥離技術が後期旧石器時代前葉という時間帯の中である程度時間幅をもって存在し、米ヶ森遺跡において出土した十数枚もの矩形連続剥片剥離はその末期的様相であることを指摘した。

第Ⅳ章は東日本の日本海側で発見されている横長剥片を素材とするナイフ形石器を主体とする石器群を瀬戸内系石器群として捉え、これらの遺跡出土の石器群を網羅的に取り上げ、その剥離技術、石材選択、石器組成などから石器群の編年、石器を残した集団の性格等を論じた。瀬戸内系の石器を残した集団は波状的に北陸地方や東北地方日本海側に近畿・瀬戸内から移動しており、この地域から出土する瀬戸内系石器群の剥片剥離技術、ナイフ形石器の形態の違いは年代差として捉えることができる。

まず一部の研究者には日本海沿岸地域の国府石器群として知られていた御淵上遺跡の瀬戸内系石器群の資料を再検討し、剥片剥離技術に瀬戸内技法第 2 工程が普遍的に存在することを初めて明らかにした。また石材の検討から輝石安山岩が瀬戸内系の資料にのみ使用されていることから、瀬戸内技法と輝石安山岩の密接な関係を指摘した。

次に樽口遺跡や野尻湖遺跡群での瀬戸内系石器群の編年的位置付けをもとに、周辺地域における瀬戸内系石器群との比較検討をおこない、瀬戸内系石器群の日本海沿岸地域での存続時間の問題について論じた。

第Ⅴ章では第Ⅲ章で論じた後期旧石器時代初頭に特徴的な斧形石器（局部磨製石斧）の列島規模での分布、年代を明らかに用途と機能について論じ、縄文時代草創期に位置付けられる局部磨製石斧の機能についても検討をおこなった。

第Ⅵ章では視点を東アジアに広げ、環日本海沿岸地域として列島の後期旧石器文化の位置付けを目指した。列島の旧石器文化は大陸に起源をもつことは明瞭で、立野ヶ原系石器群や装身具などを例に大陸との文化的関係に言及した。

以上のように、日本海沿岸地域における旧石器時代の石器群の検討を詳細におこない、その変遷と周辺地域との関係を汎列島の視野のもとで明らかにした。旧石器時代の日本海沿岸地域は独自の地域性をもたず、各段階に応じて周辺地域との活発な交流が認められる。瀬戸内系石器群は近畿・瀬戸内地方から北陸を経由して東北地方まで一気に北上しており、これとは逆に東北地方の石刃石器群は北陸経由で近畿地方までもたらされ、また北方系の削片系細石刃石器群も日本海経由で近畿地方、山陰地方にまで到達した。さらに後期旧石器時代初頭の立野ヶ原系石器群は、北海道から山陰までの日本海側に技術基盤を共有する石器群として存在したことが確認される。本地域におけるような広範囲の集団移動や特徴的な文化要素の分布は太平洋側では認められず、日本海側の後期旧石器文化の時期を超えた特異な地域的特徴として評価される。